

鉄砲百人組のなりたち

現在の百人町の町名は、江戸時代、この地に鉄砲百人組という武士たちが住んでいたことから名付けられました。では、鉄砲百人組とはどのようなものだったのでしょうか。

江戸時代、幕府の下級武士たちは、同じ職務で集団をつくっていました。これを組（くみ）と呼びました。当時、鉄砲を持って戦いに出た集団・鉄砲組の中で、同心（どうしん）と呼ばれる武士たちが100人づついた組を百人組と言いました。大久保の鉄砲百人組もこれにあたります。

同じ組に属する者はまとまって屋敷を与えられていました。これを組屋敷（くみやしき）とも、大縄屋敷（おおなわやしき）、大縄地（おおなわち）とも言われました。大久保の鉄砲百人組にもこの大縄屋敷を与えられています。これが現在の百人町1丁目から3丁目にほぼあたります。

鉄砲百人組には、伊賀組（いがぐみ）、甲賀組（こうがぐみ）、根来組（ねごろぐみ）、二十五騎組（にじゅうごきぐみ）がありました。伊賀組は伊賀（現三重県伊賀）、甲賀組は江州甲賀（現滋賀県甲賀郡）、根来組は紀州根来（現和歌山県那賀郡岩出村根来）の出身者で組織されており、二十五騎組は新たに設置されたと言われています。同心をたばねる与力（よりき）が、他の組が20人いたのに対し25人だったため、二十五騎と呼ばれたそうです。大久保の鉄砲百人組は伊賀組とも二十五騎組とも呼ばれていました。

大久保の鉄砲百人組が江戸時代のいつごろから現在の百人町に住むようになったのかははっきりしたことはあまりわかりません。江戸時代に作られた彼らの歴史を記した由緒書（ゆいしょがき）には次のように書かれています。

天正18年(1590)、江戸に入った徳川家康は、家臣の内藤清成(ないとうきよなり)に四谷の地を屋敷として与えました。この屋敷はしだいに小さくなりましたが、現在の新宿御苑にあたります。当時、大久保の鉄砲百人組はこの内藤清成に預けられていて、共に江戸の西側を守っていたと言われています。

慶長7年(1602)、家康が中野に鷹狩りに来たとき、大久保一帯を百人組の屋敷とすることが認められ、その年には与力25人、同心100人があらためて内藤清成の配下となりました(慶長6年[1601]とも言われています)。大久保の鉄砲百人組がこの地に住むようになるきっかけは、このように書かれています。

当時、内藤清成は青山忠成（あおやまただなり）と共に、関東総奉行（かんとうそうぶぎょう）と呼ばれる役職にあり、老中（ろうじゅう）と江戸町奉行の役目を併せ持っていたと言われています。このような重要な役職の配下にあった鉄砲百人組は、まだ江戸が落ちついていない頃、江戸の西側を守るために設置されていたと考えられています。

注：てっぽうは鉄砲とも書きますがパンフレットでは常用漢字表記の鉄砲で統一しました。